

Ai（オートプシー・イメージング）という言葉は、海堂尊著「チーム・バチスタの栄光」「死因不明社会」などのベストセラーで、一般人の人々がまず知るといって社会に普及してきました。これは、医療界においてはかなり特異な現象だと思えます。

医療界では、Aiが提唱された2000年以降、Ai学会にリードされるような形で、日本医師会（07年）、日本放射線技師会（08年）などが検討会を立ち上げ、実際の読影に関与する団体であるはずの放射線科自体は、09年1月に下部組織である日本放射線専門医会・医会がやっとAiワーキンググループ（WG）をつくり、09年10月のAiガイドライン（ベクトルコア）を出版するという形の後を追っています。

また、臨床学会系のAiに関する動きはさらに鈍く、日本救急医学会がやはり09年に検討会を立ち上げたのが最初で、日本医学放射線学会は、10年6月に始まった厚生労働省の「死因究明に資する死亡時画像診断の活用に関する検討会」で、Aiに関する研修制度に対する予算が付いてから初めて動き出しました。

救急科専門医65%が「Ai経験あり」

一般社会がリードするといっても、実は実際の医療現場ではかなり前からAiが実施されていました。それは、救急関連のAiです。Ai学会が行った05年のアンケートでは89%の救急病院でAiが実施されているとの回答がありました。また、09

年に日本救急医学会診療行為関連死の死因究明等の在り方検討特別委員会Ai作業部会が行った「救急科専門医に対するAiに関するアンケート（救急科専門医2848名にアンケート、回収率27.7%）」では、救急科専門医の65%がAiの経験があるということでした。

これは、Aiという言葉が定着していなかったということもありますが、来院時心肺停止で搬送された症例を保険請求するために「生きていることとして」検査されることが多く、死後画像検査を実施していることをあまり公にしたいくなかったからです。

Ai自体は、CT装置などがあればどこでもできる検査です。ただ、Aiという概念がなかったために学会などで発表する場がなく、症例もまとまらないという悪循環を起していました。Aiが社会に認知されてくると、Aiを知っている人の割合は、17%（05年）から89%（09年）に急上昇しています（同アンケート結果）。

放射線科医には、死体に画像診断をするという発想はありませんでした。Aiという言葉を使って、死後画像検査を1つの学問にするという発想が重要だったのです。まさにコロンブスの卵です。また、Aiは、どこでも平等にCTを使って客観的な死因究明を行うことが可能で、全国に1万台以上CT装置がある日本の事情によく合った死因究明方法なのです。

このように、すでにインフラが整備されている病院のCT装置を使ってAiを行うことが対費用効果を見

ても、日本の現状（解剖率が3%を切っている）を考へても妥当な方法だと思えます。ただし、これにもいくつか問題があります。

1つは読影をどうするかです。撮影に関しては、CT装置があるところには診療放射線技師がほぼいますので、彼らにAiの知識を身に付けてもらい、画像診断に適した画像を撮影してもらえばよいと思えます。

Aiの講習会を開催

それでは、読影をどうするか？です。この連載でも取り上げていきますが、死後画像は、生前画像とは異なった考え方、見方をしなければならぬことがあるので、できれば、Aiの知識を持った画像診断医に読影してもらうのがベストです。ただし、画像診断医の数も限られており、病院に診断医自体がないことの方が多いためです。次善の策として、Aiのオーダーをする医師に、Aiに対する知識を身に付けてもらい、読影してもらうことを考えました。

11年2月のAi学会に合わせてAi

講習会を開催するのでぜひご参加ください（詳しくはホームページ <http://www.autopsyimaging.com/> を参照のこと）。ただし、彼らにすべての読影を任せるといってにはいきません。分からない所見、疑問に思った症例などがあつた場合は、コンサルトできる方法を考へておかないと、実際にAiを行ってもらって臨床の先生方の負担ばかりが増え、うまくAiは広まりません。これを打開する方法が、Ai情報センターです。

放射線専門医の資格を取得した、Aiの経験豊富な画像診断医が登録されており、インターネットを使用してある程度即時性を持った対応ができるようになってきました。「何か困つたことがあつた場合のお助け所」的な組織だと思つていただけると分かりやすいでしょう。また、最近では医療訴訟などで、遺族が第三者の意見を聞きたいという訴えもあります。この場合にもAi情報センターは役に立つでしょう。

今回は、病院外におけるAiについて、解説します。



Yamamoto
Seiji

生年月日

1967年9月25日（43歳） 東京都出身

経歴

1992年 3月 千葉大医学部卒業
同年 6月 同大放射線科入局
2005年 同大放射線科講師
2009年 千葉大医学部付属病院Aiセンター副センター長、Ai学会理事長
2009年12月 Ai情報センター開設
2010年 3月 千葉大退職
2010年 4月 Ai情報センター代表理事
千葉大付属病院Aiセンター非常勤講師、放射線医学総合研究所重粒子医科学センターAi情報研究推進室非常勤講師